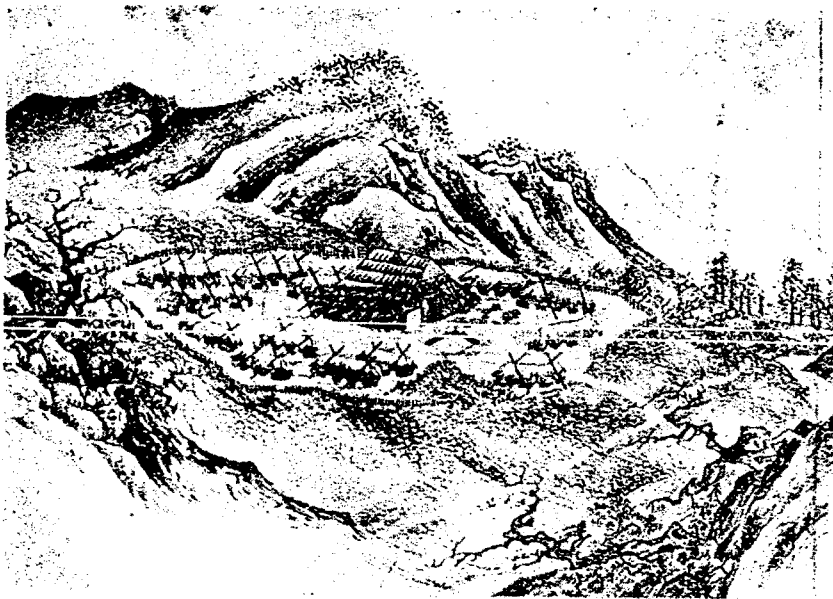


東城町史跡探訪



淘鉄図 其ノ一 鑛場全景 (安永年)



淘鉄図 其ノ二 砂鉄水洗作業

講師 都内博出

杉原道彦

田口義之

1996年4月14日

備陽史探訪の会

本日のスケジュール

9:00 出発
10:00? 東城町 道の駅
10分間 トイレ休憩
10:30 五品嶽城 登山開始
11:? 本丸到着
昼食
12:? 下山開始
13:? 千寿寺
? 徳雲寺
? 亀山城
17:30~18:00 帰福

諸注意

団体行動です集合時間は守ってください。

山林といえども私有地です。

マナーは守ってタバコのポイ捨ては絶対にしないでください。

草花にも命があります。又、法律的にも勝手に取っては罰せられます。

お寺は宗教の場です。厳粛な気持ちで参拝させていただきます。

トイレの場所は少ないのであるところですませるようにしましょう。

久代村 東城町久代

東は備中国野多郡(現岡山県阿賀郡)および川上郡(現岡山県川上郡)・南は神石郡の小野村・新免村・東山郡・三坂村に接する。北の川西・川東両村境から村内に入る東城川は村域や東寄りを南流し小野村へ流れる。なお途中、備中国境から西南流する野辺川は河内で、重松谷・平田・丸山を水源とする大森谷川は宮原で、また村域東南部の高野谷を水源とする高野川も西流して堀谷でいずれも東城川に注ぐ。一方、村域西部の重松谷を北東方向に流れる高野川(又東川)は、村域中央部の三原野谷や政光谷を水源として北西流する上野川を上野谷で合わせ、川西村との境を流れて川西村末で東城川に合流する。果落はこれらの川筋に沿って開けた谷間の狭長平地に散在するが、河内・宮原の盆地周辺がやや密である。村内には縄文時代の石棒が出土した長谷原遺跡や太室古墳をはじめ二三基の古墳が確認されている。

戦国時代、奴可郡を支配し、一時は備中にまで勢力を拡大した宮氏(久代氏)は当地から興ったといわれ、六代の間当地の比田山城を本拠にしたとされる。

村高は、元和五年(一六九〇)の備後国知行帳に九一六石余とあるが、元禄四年(一六九二)の地帳帳(国郡下書出帳)所収は畝数一八八町六反余で高九二一石余と記し、「芸藩通志」や幕末期の「郡勢拾葉録」(小田家文書も同畝同高である。「郡勢拾葉録」による幕末期の内訳は、川成間五反余で五石余、田方五六町九反余で五六五石余、畠方二六町余で三三三石余、畠敷一町五反余で三三石余、新開高三町六反余で四石余となっている。広島藩領で明知。

村内南部の畑谷・丸山・重松谷・杉折谷などは山が迫り日受けが悪いが、そのほかはいくつか日受けがよく、また当村は郡内では最も暖かく、麦作も相応にできるところで、耕作条件は平均してよいほうであった。三原野谷・飛田野谷などは石灰岩台地で田作ができず、煙草・柿などを作った。農間は薪を焼いて東城町で売った。村内永久山麓近くの村民は備用大炭を焼いたり、粉鉄府で東城川の砂中から砂鉄を採取したりして備場に売却し収益をあげた(国郡下書出帳)。「芸藩通志」によれば戸数一六七・人口六四九・牛三七九・馬一一で、牛の飼育に力を入れていることがわかる。なお永久山麓は江戸時代後期に創設された備で、原料の砂鉄はほとんど東城川で採取された川粉鉄を使用した。備の製品である鉄のうら良質のものは、宮内省産品部新市町や備中国高松(岡山県高松市)の備物師屋に輸出、並みの鉄や銅は村内の重松谷、東隣の備中国大野郡村(岡山県阿賀郡高野町)・また三坂村の大蔵治屋に輸出された。大蔵治屋で鍛錬してつくられた包丁鉄は東城川一成羽川・高梁川を通じて舟運で玉島・岡山県赤松市に集められ海路大坂に送られた。永久山麓は大正初年まで操業された久代村産。

宮原にある河内八幡宮は久代の二宮で、祭神は品陀和気命・幣中津彦命・息長帯姫命。鎮座年代は明らかでないが、宮氏が当地の高野八幡宮への遷座所として同八幡宮から勧請したと伝えられる。古い棟札に「奉再興八幡三所一字事、天文十九年戌八月十日、大體那突已親親尚并代官王申慶勝」と記される。宮氏の本拠比田山城のすぐ麓にあり、城の鎮守社であったと考えられる。太室山(天王山)の頂上に鎮座する太室神社は久代の三宮で、「芸藩通志」は祇園社と記すが通称「久代の天王さん」という。祭神は須佐之男命・備前田比売命・大己貴命。古く疫病流行に際して京都八坂神社から勧請したものと考えられる。境内社に火神迦具土神を祀る愛宕神社、菅原道真を祀る菅原神社がある。

重松谷にある曹洞宗能楽寺はもと新免村(現東城町)の寿福寺の末寺であった。豊饒山と号し、本尊は薬師如来。「国郡志下調書出帳」および寺伝によれば、応永二年(一三九五)比田山城主宮正左衛門利吉が開基檀越となり創建したという。代々宮氏の菩提寺であったが、その後、宮氏の本拠地移転に伴い寺基も移り、一時廃寺となったが、寛文年間(一六六一〜七三)壽福寺二世文室が開山となって復興させた。旧版「広島県史」は寺の復興について、増原主計介信光が喜捨を募り元和六年に再建し、前記の文室を請じて開山としたと記す。

吉備津神社

●東城町久代 河内宮原

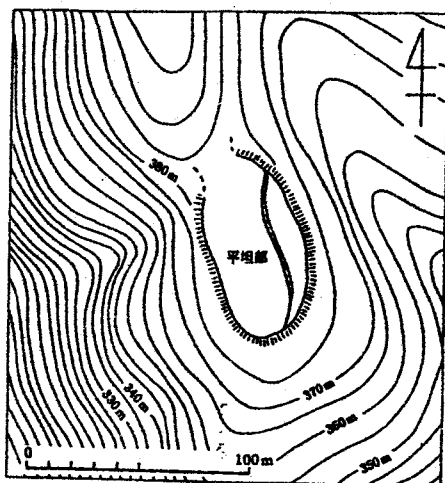
久代の一宮で産土社。祭神は大古備津彦命、相殿に弥都波能売神・金山彦命・大山祇命・須佐之男命を祀る。旧村社。古く品治郡宮内村(現産品郡新市町)の備後一宮吉備津神社の分霊を勧請したと伝える。天正五年(一五七七)大體那官景盛・智盛、代官藤原朝、國頭左馬太夫、本願寺崎基左衛門忠統の名を記した再建棟札が伝わる。境内社に大吉備津彦命の母大倭根子彦備荒日比売命を祀る北の御前社のほか宮荒神社・若宮社がある。

七三 比田山城跡 (35) 大字久代

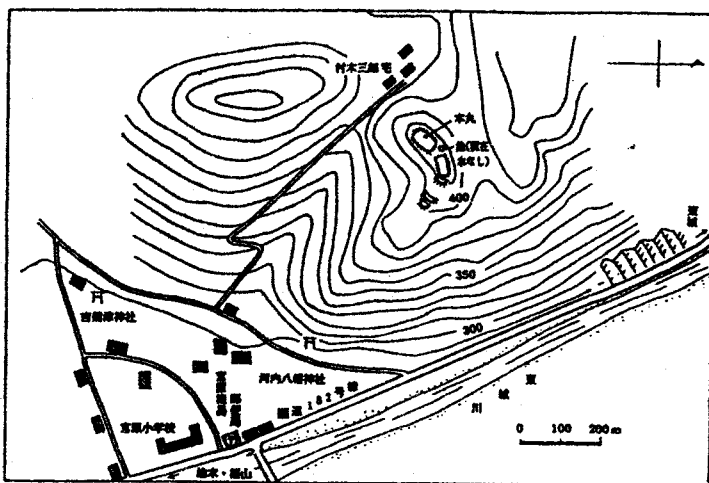
位置・環境 東城川(成羽川)と野郎川、久代川の合流点の河内地域西側の丘陵頂部につくられており、標高は四一〇メートル、平地からの比高は一二〇メートルで、久代の河内盆地が一望できる地に立地している。

遺跡の状況 (第三四〇図) 丘陵頂部の主郭を中心に五つの削平段により構成されている。堀切や土塁などの施設はみとめられず防衛機能は整っていない。主郭とその北東の郭は一六〇〇〜一八〇〇平方メートルの広さがあるが、そのほかの郭はいずれも小規模である。主郭の北東側下手には井戸跡がみとめられる。

特色 構造的にみて防衛施設がみとめられず、郭を段状に単独して配していることなど室町期の城の特徴をもっている。江戸時代初頭に著わされた戦記物語の「久代記」には室町前期の応永年中以来、久代宮氏の本拠地であったと伝えられている。また、江戸後期の「芸藩通志」や「西備名区」などにも比田山城(別名河内城)は、応永年間に宮正左衛門利吉によって城が築かれ、その後七代にわたって居城し、戦国期の天文年中に西城の大富山城に移ったと記されている。久代宮氏の本拠の城としては、この城は小規模であることから、恐らくは丘陵西側麓付近に居館や家臣団の屋敷を構えており、非常の時の詰城として築かれたものと推定される。



第341図 比田の的場跡付近地形図



第340図 比田山城跡付近地形図

七四 比田の的場跡 (36) 大字久代

位置・環境 東城川と野部川、久代川の合流点の河内地域北側で比田山城とは東城川を挟んだ対岸に位置している。北から南へのびる丘陵根の頂部につくられており、標高三八〇メートル、平地からの比高約一〇〇メートルである。

遺跡の状況 (第三四一図) 丘陵根先端部に長さ約六〇メートル、幅四〇メートルの自然の地形をわずかに加工した大きな削平段がある。この平坦部の東側は、わずかに段差をもっている。

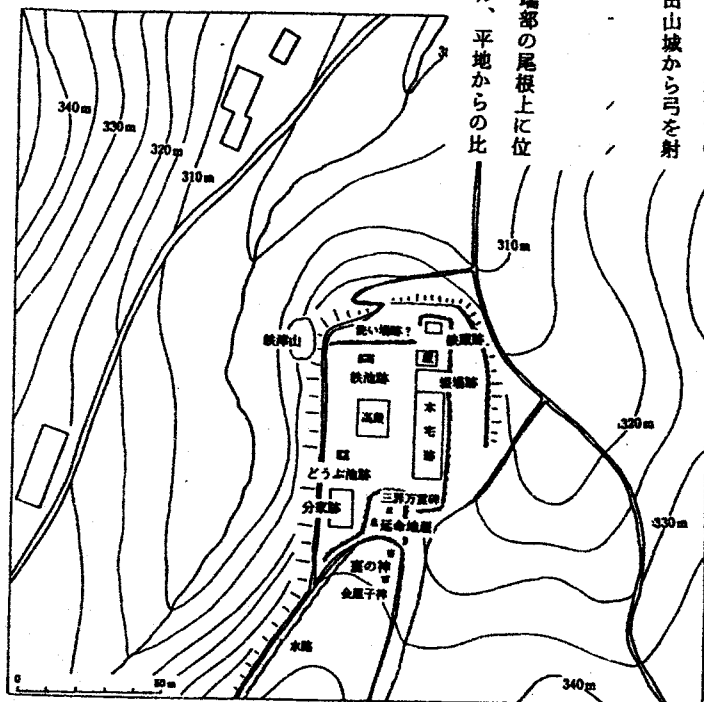
特色 削平状況は明瞭でなく郭かどうか明らかでないが、古くから久代宮氏の家臣が対岸の比田山城から弓を射た的場であったとの伝承がある。

一九一 永久山たたら跡 (四) 大字久代

位置・環境 南から北へのびる丘陵先端部の尾根上に位置しており、標高三二〇～三三〇メートル、平地からの比

高約二〇～三〇メートルである。丘陵根上を削平して数段の平坦面をつくり、周囲を石垣で区画して山内を築いている。江戸後期以降、久代の遠藤家が経営したたたらで山内遺構がよく残っている。

遺跡の状況 (第四八五図) 現地踏査および『久代村誌』(昭和八年)の記載内容から推測すると、最も広い平坦面の中央に角打高殿があり、南西部には石組みのどうぶ池(道具池)跡と分家跡がある。



第485図 永久山たたら跡付近地形図

また、高殿の東側には遠藤本宅跡、蔵跡、鉄蔵跡があり、北側には鉄池跡が位置している。鉄池跡の北は、一段下がつて幅の狭い平坦面がつくられており、砂鉄の洗い場があったとみられる。また、広い平坦面の東側も一段下がつて長さ三〇メートル、幅一〇メートル前後の細長い平

戦国時代、現在の比婆郡東半に当たる旧奴可郡一帯を支配した有力豪族に、久代宮氏がいる。県内有数の中世山城跡、西城大富山城、東城五品岳城の城主としても有名な同氏については、今まで主に『久代記』（注①）を材料にその叙述がなされてきた。同書は江戸初期の成立と言われ、同氏の研究にはなくてはならない文献である。しかし、その内容には問題点も多い。特に、戦国期に活躍した高盛以前の系譜には疑問がある。

『久代記』によると、久代宮氏は元大和国宇陀郡の武士で、初代宮弾正左衛門尉利吉が応永年間（一三九四～一四二八）、備後国奴可郡久代（現比婆郡東城町久代）に配流されたことに始まり、以後景英・利成・息成・景行・景友と相続し、七代上総介高盛に至ったとある。ところが、宮氏は、備後生え抜きの国人衆であって、南北朝時代には既に旧奴可郡に勢力を延ばし、久代には応永以前、宮氏の一族が土着していた形跡もある。つまり、同書によれば、久代宮氏は、同じ宮姓を冒しながらも、備後屈指の大豪族宮氏とは無関係、ということになるのである。勿論、その可能性がない訳ではない。しかし、『備後古城記』の原本と推定される『水野記』

所収の「御領分古城主」を見ても同氏の記載は「宮久代」とあって、他の宮一族の記載となんら変わるところがない。やはり、宮姓を冒すからには同じ一族と考えるのが妥当であろう。

また、高盛以前の六代に関しては、その実在を示す確実な文書・記録は一切残っていない。『久代記』の高盛以前が信用できないとすれば、その出自を他の宮一族に求める必要がある。私はこれを室町期に幕府奉公衆として活躍した宮氏の一方の主流、「宮上野介家」に求めたい。その理由は、左の通りである。

まず、久代宮氏は戦国期、「源姓」を冒している（注②）が、宮一族の中で「源姓」を称したのは、宮上野介家の一門のみである（注③）。また、戦国中期の天文年間（一五三二～一五五五）を境にして、旧奴可郡域の支配者は宮下野守家から久代宮氏に変わるが、『大館常興日記』天文十年（一五四一）八月四日の条によれば、それは下野守家の断絶と宮彦次郎によるその遺跡の「切取」という事態を受けてのことであった。そして、大内方として宮下野守家の所領を押領した「宮彦次郎」こそ久代宮氏に外ならないと考えられることである。宮彦次郎は室町期に幕府奉公衆に名を連ねた宮氏の一族で、仮名「彦次郎」は宮上野介の一門であることを示している（注④）。

以上のことは、『山内首藤家文書』二一六号
山内隆通條書を検討すれば、よりはつきりする。
同條書によれば、山内隆通は「宮家并東分小奴
可」など久代宮氏の押領した地一切の領有を毛
利氏に要求し、元就の承認を得ているが、隆通
は久代宮氏の領有する「備中八鳥山之儀（現岡
山県阿哲郡哲西町）」は要求しないといってい
る（注⑤）。これは「平賀家文書」年欠三月二
三日付陶興房書状に言う「備後両宮并備中衆」
が山内直通・大内氏の支援を得て「野部新城・
八鳥兩城切捕由」という出来事に対応すると考
えられ、山内氏としては自己の承認した所領は
要求しないと言うことである。つまり、この「兩
宮」こそ久代宮氏の先代に当たる訳で、「兩宮」
を宮上野介家の一門と考えて良い（注⑥）とす
れば、前述の仮説が立証されるわけである。
注①一般本と伊藤本があり、ここでは一般本を
採る。

②比婆郡西城町浄久寺藏の「宮景盛壽像（永
禄十年の銘あり）」によれば、景盛の祖父高
盛は本来藤原姓にもかかわらず源姓を称した
とあり、景盛の父興盛、その子智盛、一族と
推定される親盛・尚盛にその微証がある。

③『萩藩閥閥録』卷八十三有地右衛門書出に、
宮上野介家の祖、兼信の嫡子氏信は尊氏より
「氏」字を頂戴し、一代限り「源姓」を称す

ることを許されたとある。また、「応永度大
嘗会関係文書」によれば、氏信の次男氏兼は
「源氏兼」として称光天皇の大嘗会に奉仕し
ている。

④『文安年中御番帳』（群書類従所収）に「四
番宮彦次郎」、「康正二年造内裏段錢并国役
引付」（同上）に「二貫文、宮彦次郎殿 備
後国三箇所段錢」とある。宮上野介と同じく
四番衆に属していることと、同家と同じく「次
郎」を仮名（満信の子息と推定される上野介
教信の仮名は「又次郎」である「永享九年行
幸記」（群書類従所収）としていることか
ら、極めて近い家筋で或いは上野介満信の弟
である氏兼（『山内首藤家文書』八三号等）
が彦次郎家の初祖と考えられる（注⑥参照）。
⑤「国郡志御用二付郡辻差出帳」によれば哲
西町野部の四王寺は、天文元年（一五三三）、
宮上総介盛親（高盛）同忌兵庫助興盛の再興
と伝え、また、『備中府志』によると同地の
西山城には天文年間、「久代弾正」が居城し
たと言う。

⑥宮上野介家の祖兼信の孫と推定される満信・
氏兼（前述）は、各々次郎左衛門尉、次郎右
衛門尉を称しており、兩人の子孫が備後両宮
と呼ばれた宮若狭守・同五三郎（『小早川家
証文』二〇二号等）と考えられる（注④参照）

東を除く三方を川西村に囲まれる。川西村の内に發展

〔町の成立〕 戦国末期、宮原友が川西に築いた五品郷城の城下が市街化したのを初めとする。城下町として整備されたのは、近世初め福島正則の家老長尾一勝が当地に入つたときと考えられる。元和五年（一六二九）浅野氏の入国後は五品郷城は廢城となつたが、備中・備後の国境警備の必要上から、また藩内の重要拠点という軍事的意味から、当地には広島藩家老を駐とせしめ、常駐させた。しかし一般政務は代官所を西城町に置いて支配した。

〔町の様子〕 町高は畝數一三町五反余で高一五四石余、内訳は町人屋敷高が二町一反余で三三石、町人屋敷高概ね掛り一町二反で二九石余、町分田畠概ね掛り一〇町二反余で一〇三石余となっている（高畠が繁盛）。町の行政は町年寄二、町庄屋一のものに町内を一〇組に分け、組ごとと

東城町は備後国北部の鉄の集散地として栄えた。町内の鉄間屋は周辺村々の大鍛冶屋で製造された長割鉄や、鑪で製造された鉄を集め、馬背で備中の炊屋（現岡山県出雲市）、成羽町（現岡山県成羽町）や川之郷（現岡山県新見市）に運入したり、筏や川舟で成羽（岡山）、成羽町（岡山）や川之郷（岡山）に運び、そこで積替えて玉龜（岡山）、敷敷市（岡山）に運び、さらに讃岐の高松や大坂に送って全国市場にのせ販売した。大阪住吉大社の高さ約三メートルもある一対の大灯籠路によれば、享保一八年には町内に二六軒の鉄間屋があり、これらの間屋から送られた鉄を大坂で一括引受けていたと考えられる間屋の東城屋と次兵衛とともに共同で住吉大社に大灯籠を寄進したことが知られる。

「比婆郡誌」によると、天明年間（一七八一・八九）の大火で市街の大半が焼失し、当時家屋のほとんどが藁葺だったのが以後瓦葺になり、市街の景観が改まったという。

「芸藩通志」によれば戸数三八・八・人口一千八一・牛七、馬二一、東城川に沿う本町通の裏筋一帯は古くから後町と称しているが、川舟の発着場として賑い、いつの頃から兵来町とも呼称されるようになっていた。

当町は宿駅とされていたが、「蒼蒼通志」によると、「伝馬定数なし、遞送西は西城に至る五里、東は備中八鳥へ一里八町」の間が利用された。「国郡志下書出帳」によれば、他の街道の宿駅と異なる利用者が少ないので、その時々に入馬とも雇ったという。駄賃は本町通の高札前から西城町までは本馬二〇八文、うち四三文は坂の増賃、輕尻一四二文、人足一〇四文、備中の八鳥、現岡山県阿賀郡野西町までは本馬三八文、輕尻二五文、人足一九文であった。寛永一〇年以後、度々幕府の巡見使が訪れたが、巡見使は常に三名で二〇〇人前後の供餉を連れており、町内で宿泊する場合は上梶屋・大板屋など富商の家に分

四四 九条道家初度惣処分状「九条家文書」

宮内庁書陵部所蔵

「光明峯寺殿初度之御」

建長二年十一月

采々事

山城國小塩庄

播磨国千草村
〔九条忠家〕
本家右大臣、以年貢充寺修

〔九条忠家〕
本家右大臣、以年貢充寺用不

備後國〔奴可郡〕奴可東条

（補原佐子）
本家尚侍殿、以年貢可充、
寺用不足、

以小塩庄、一向於寺

充臨時恒例課役事也、

千草奴可兩庄者、以本家、讓与尚侍右府、以年貢

分司充用不足并修理料。若有余殘者、可濟本所。

但推亡之年以寺用為先、於本所年貢者、可被

本所役可勤本所、於臨時者為令全寺用、

不可不充也。努力不可違失。

ゆかたへ。額田部 部民の一種。応神天皇の子額田大中彦の名代説が有力である。「新撰姓氏録」には、左京神別にある天津彦根命系と、摂津国神別にある明日名門命系の二種類がみえる。これによれば、諸資料にみえる額田部は必ずしも同一系統とは限らないかもしれない。天津彦根命系の左京神別、額田部湯坐連の項に「允恭天皇御世、被遣薩摩国、平・隼人、復喪之日、献御馬一匹、額有町形迴毛、天皇嘉之、賜姓額田部也」という伝承をのせる。しかしながら、近年では応神天皇の子額田大中彦皇子の名代として、額田部を考ふる見解が有力である。額田部は、大和・河内を中心に西海道の筑前・豊後・肥後から東海道の常陸・東山道の上野に至るまで広範囲に分布している。額田部の伴連氏族としては、額田部連・額田部臣・額田部直・額田部君・額田部首がいた。額田部連氏の本拠地は大和国平群郡の額田郷(奈良県大和郡山市額田部北・南町付近である可能性が高い。額田寺(額安寺)は、額田部連氏の氏寺である。六世紀後半に造られたという松江市の岡田山一号墳から「額田部臣」と象嵌された大刀が出土している(本辞典第九巻別刷版「古代の鉄剣銘」参照)。なお、額田部を額田大中彦の名代とする説以外に、田部の一種とみる見解がある(太田亮(あきら)「姓氏家系大辞典」)。また、皇子養育のために置かれた皇子部民(湯坐部)としての性格を強調する見解(井上辰雄説)もある。

五七 五品嶽城跡 (19) 大字東城

位置・環境 成羽川と戸字川に挟まれた北西から南東に連なる山塊の最も東側の頂部、通称城山の山頂部から山腹にかけて築かれた山城である。中心の郭群は、城山最高所の標高四八四メートル付近の常の丸、太鼓の平と呼ばれる地域である。主郭からは、東城の町並はひろのこのこと成羽川沿いの沖積地を眼下に見渡すことができる。常の丸の西側は、高さ約一五メートルの大堀切で遮断しており、この大堀切の西側にも三条の堀切が設けられている。

遺跡の状況(第三二四図) 常の丸は、約五〇×三〇メートルの削平段で、周囲は石垣で区画している。西端には、長さ二三メートル、幅一〇メートル、高さ三メートルの石垣をめぐらした構台状の高まりが築かれている。構台状の石垣は鉤形をなしており、いわゆる「折れ」を意図したものと推定される。この石垣の東側下手には石積の井戸がある。常の丸の東には、帯郭状の郭、池や築山のある郭があり、太鼓の平に続いている。太鼓の平は、三五×二七メートルほどの大きさがあり、北側には土塁が東西にめぐらされている。郭群は、この太鼓の平から北側さらに東側丘陵尾根へ続く北郭群と東側丘陵尾根に続く東郭群とに分かれる。北郭群は、太鼓の平の北にケヤキが平にあり、その東側下手にはカヤの平がある。いずれの郭にも西あるいは北側に土塁がみられる。カヤの平は本城跡の最大の郭で東西約六五メートル、南北約三〇メートルの大きさがあり、西側部分には、石積み井戸、地覆石をもつ瓦葺礎石建物跡などがみられ、また、郭の東端は鉤形をなしており「折れ」を意識したものであろう。本城のなかでも中心的な施設が存在したと推定される。東郭群は、丘陵尾根上に段状に三郭が設けられている。各郭は単独に配されている

ようであるが、郭の上・下を仕切る切岸は明瞭となっている。北郭群と東郭群とに挟まれた谷頭には、砂防堤状に石積みをはどこした二つの郭がある。登城通路もこの郭のところで分岐していることから推測すれば、この付近に城門(城戸口虎口)が存在したのかもしれない。このほか東南側山腹には杉の平や物見が丸などの郭群があり、東側山麓には居館があったとされている。

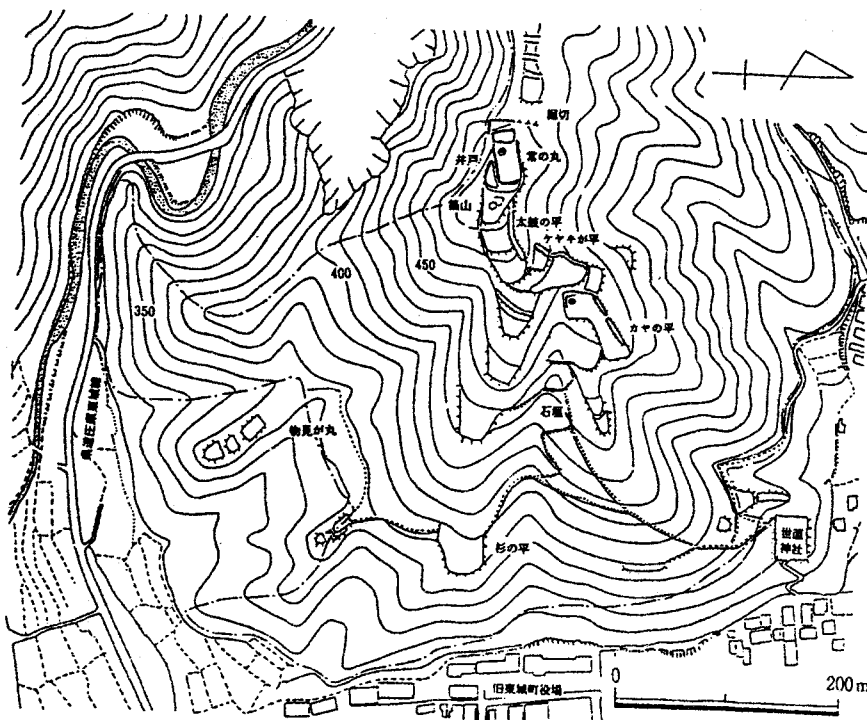
出土遺物 常の丸西側の堀切付近から瓦類の破片が出土している。第三二四図は長尾氏の家紋をもった瓦片で、棟などに使用されたものであろう。

特色 五品嶽城は、標高約四八四メートル、平地との比高約一八五メートルの半独立丘陵のほぼ全域を利用した典型的な戦国期の山城である。城山の頂部から丘陵尾根上を中心に三〇以上の郭が設けられており、防御施設としての堀切、土塁、石垣、「折れ」の施設のほか日常生活のための城館跡、井戸、築山、池などの諸施設も整っている。

本城の築城年代については、明らかでないが、自然の地形をわずかに加工し、防御の施設もみられない山麓近くの「物見が丸」や「杉の平」などは、室町期に入ると造作が始まったと推定される。城山山頂部については、「石垣や土塁、堀切、井戸などの構造からみて戦国期に入って拡張、整備されたものとおもわれる。」「芸藩通志」(「西備名区」)、「備後古城記」などの史料によると、宮氏が築城し、西城の大富山城に移るまで本拠としたとされ、天正十九年(一五九一)には、石見国から佐波広忠が赴任し、菩提寺を川東の千手寺に合併し、寺領を寄進している。この佐波氏も関ヶ原合戦後の毛利氏の防長移封とともに萩に移っており、その後には、福島正則の臣、長尾隼人正一勝が城主として赴任している。五品嶽城は、長尾氏の代には世直城と呼ばれたように、城下の整備に力をそいだとおもわれる

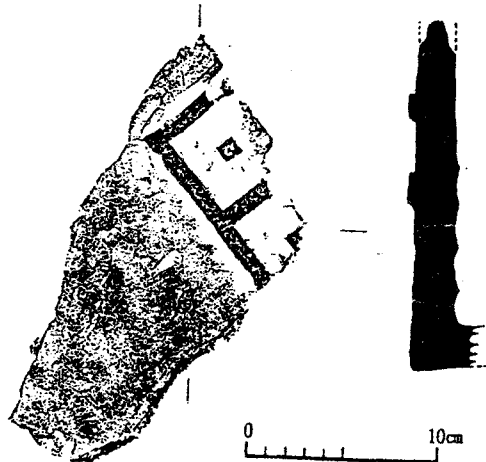
が、元和元年（一六一五）の一國一城令の発布とともに廃城になったものと考えられる。五品鐵城は、規模、構造など比婆郡を代表する山城であり、しかも文献史料からも実証できる遺構として広島県史跡の指定を受けている。

なお、長尾氏は、城主時代に鉄製の鐐口一口を帝釈永明寺に寄進しており、法恩寺には、大般若經六〇〇巻を寄進している。



第323図 五品鐵城跡付近地形図

千手寺 東城町川東
 焚火山南東の山腹にある。花谷山吉祥峰と号し、曹洞宗。本尊は千手観音。
 寺伝によれば、天平年間（七二九～七四九）行基によって開かれたといわれ、当初山号を吉祥山と称した。南北朝時代の初め頃から品治郡新市（現広島県新市町）に本拠を置く宮氏一族の崇敬を得、ことに宮崎重は貞治六年（一三六二）仏殿堂舎を改築寄進し、翌年臨濟宗の仏眼道濟禪師が落慶法要を営み中興開基になったという。以来、臨濟宗の寺院として宮氏、次いでその支流と考えられる久代の宮氏の崇敬を受けたが、毛利氏による宮氏の国替によって、天正一九年（一五九二）石見国邑智郡佐波郷（現広島県佐伯市西町）から佐波越後守広忠が五品鐵城主として入部したとき、父常陸介隆秀が、同郡沢谷村花の谷（現邑智町）にあった菩提寺の花谷山大竜寺と、その末寺で旧菩提寺であった東禪寺を当地に移し、千手寺に合祀させた。そのとき千手寺は大竜寺の山号花谷山を継承、吉祥山の山号は峰号とし、曹洞宗となった。実際に大竜寺から千手寺に移った住職は連棟であったが、形式的には曹洞宗千手寺の



第324図 五品鐵城跡出土瓦拓影

開創は大竜寺開創の永禄一〇年（一五六七）にさかのぼらせ、大竜寺開山の雲庵透庵を一世としている。

康応元年（一三八九）東禪寺に納められた大般若經および經幢、永禄年間から文禄年間（一五九二～一六〇〇）にかけての大竜寺二世峯岩の法語録「圓融普用」上下二巻、天正六年に描かれた釈迦涅槃図、佐波広忠が連棟宛てに出した同二〇年の寺領寄進状・同坪付、および千手寺を神石・奴可郡佐波箇中諸寺庵の綱録と定める下知状三通と慶長三年（一六二八）の寺領寄進状などがある。慶長五年佐波氏は毛利氏に従って萩現山口県萩市）に去り、福島氏の支配になると長尾一勝が城主として赴任したが、長尾氏も千手寺を菩提寺と定めた。一勝の子勝行が父の供養のために元和五年（一六二九）に建立した五輪塔は、高さ二・六メートルの花崗岩製で、県北最大級の規模である。

千手寺は、寺伝によると天平年間開基の寺といわれ、永祿年間(1558~70)に岩見国邑智郡佐波郷の領主であった佐波広忠が毛利氏の麾下になって奴可部に知行を与えられ、東城に来住し、菩提寺としたと伝えられる。そして福島時代には、東城の城代長尾氏の菩提所でもあった。

涅槃図の一般的な構図のパターンは、中心に宝台上に横たわる人涅槃の釈迦をあらわし、周囲に、それを悲しむ仏弟子、菩薩、天部、俗人、さらに動物を描き、また宝台のまわりに四枯四栄の砂羅樹林を配置し、上方に跋提河が流れ、さらに虚空より釈迦入滅の悲報に接した摩耶夫人が雲に乗って飛来する姿が描かれ、二月十五日であるので月は満月に、と描かれる。

千手寺の涅槃図も上述の構図になるが、その特色を指摘すれば、古式の涅槃図は釈迦が両腕をまっすぐ伸ばすのに、これは右腕を上方にあげていること、古式では宝台の下方側面が描かれるのに、これは上方側面が見えていること、また画面全体に占める宝台・釈迦の姿が大きいのが古式であるが、これは小さいこと、古式は参果者の類が少ないのに、これはかなり多いこと、動物も応徳涅槃図では獅子一頭であるのに、これは多くの禽獣が描かれていること等、時代が降った傾向が強くみられる。

釈迦の表現は、肉身は金泥、肉身線は朱、衣文線は墨、着衣も金泥、金具表現の金泥は盛上彩色が見られる。その他、群青、緑青、丹、胡粉のはか多様な色彩が見られる。

画面向かって左端に「石州佐波郷花谷山大龍禪寺常住住持比丘咲岩老衲宗明命畫工武州之産滋圖畫以置、天正六年戊寅五月三日結焉、地絹三善秀威」という墨書銘があり、本図は天正六年(1578)、石州佐波郷の大龍禪寺の住持宗明が武州の画工滋圃という者に描か

せたことがわかる。なお、右端の墨書銘には「為智月童女 奉再表具東城住三好作左衛門尉政興 正徳五乙未歳九月三日 現住玉昂寛代」とあり、正徳五年(1715)に補修されたことが記されている。この涅槃図は、保存もよく、上記のように制作年代及び由来も知られ、多くの顔の表情は個性はあまりなく類型のだが、大画面一杯によく丹念に描かれている。動物の画風にも趣があり、美術的価値は高い。



県重要文化財 糸川本 著色仏涅槃図

町重要文化財 長尾準人供養塔

五輪塔としては、室町末期から江戸初期に一般的に見られる型のもので、やや優しい感じがあるが、形のととのった塔で、五輪塔としては最も新しい形式のものと思われる。しかし、一般的には小さいものが多いのに対して、形が大きいということが一つの特徴であり、長尾準人の勢力の大きさを表わしたものである。

東城町としては最大の五輪塔であり、また東城の城主としては文獻的に最もはっきりしているのが長尾準人であるから、東城町史の一頁をかざる人物の供養塔として保存に値するものと思われる。

(1) 品質及び形状（構造及び形式）

7 品質……花崗岩

1 形状……五輪塔

(7) 地輪は台座の上にすえつけられていて正面に銘文をもつ。水輪は楕円形であるが、やや上ぶくらの感がある。火輪は水輪よりやや小さく、軒の上端の隅が反らしてあるのに対して、下端隅にやや反りが認められる程度である。

風輪は楕円形をなし、上部はややくぼみ（深さ0.7cm）をもち空輪を支えている。空輪は頂きが大きくとがっている。

(4) 左右の形は全く同じで、よく整い幾何学的な感じである。

(5) 銘文は地輪にあるのみで、他に梵字なども認められない。

(2) 寸法又は重量（大きさ）

別紙図面のとおり

(3) 画賛・奥書・銘文等

(7) 地輪の正面に次の銘文がある

生國勢州河曲郡住宇多

天王末葉佐々木之孫子

長尾準人正一勝公為法名

松雲院殿深山常英居士

建立遺簡一塔以伸供養

者也 真相実利目前

明歴々喚為是為不異唯

唯放下手阿阿大笑

皆元和五

正月廿九日

教
幸子
白

(4) 伝来その他参考となるべき事項

(7) 長尾準人の経歴

伊勢國河曲郡に生る。生年は不明。山路久之通ともいう。高岡の城主。父は山路玄澤という。福島正則の家臣となり、軍功あり。福島正則が広島藩主として入封するに及び、北辺の地東城の城主となり、一万石を給せられる。

死去は元和4（1618）年11月29日という。正則の除封（元和5年6月29日）に先だったこと約半年である。享年は不明であるが、かなり高齢であったと思われる。

(4) 五輪塔の由来

石造五輪塔は、もっとも古いものは平安末期のものがあるが、鎌倉時代になって、全国的に製作された。五輪は下から方、円、三角、半月、団形をなし、地、水、火、風、空を表わし仏教思想を一つの形に表わしたものである。元来、五輪は供養塔であるが、墓上に置いたものもある。

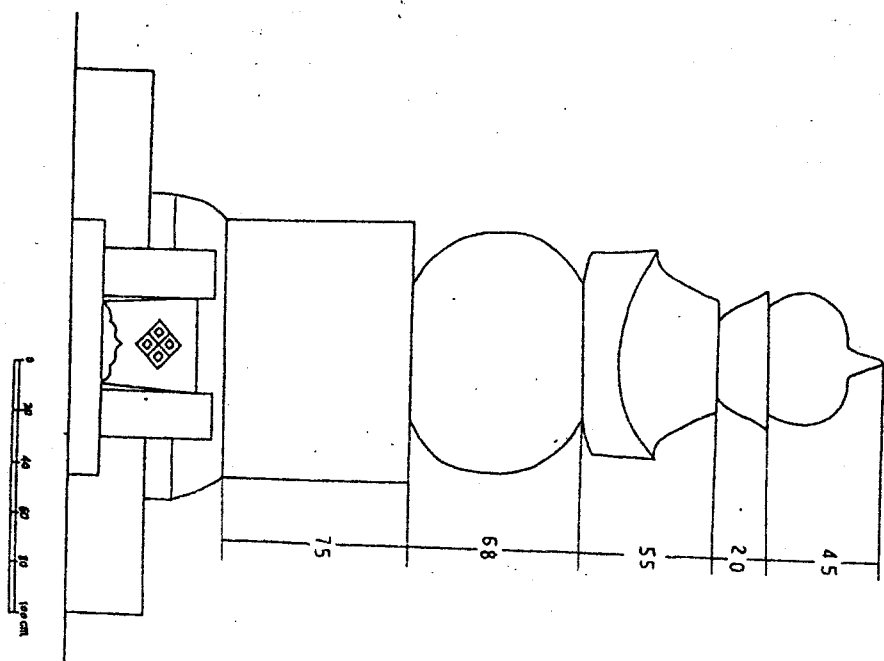
長尾準人のものは、銘文の「以伸供養」にあることから供養塔と思われ、墓は広島市にあったものとされている（東城史談集、長尾準人）

東城川の錨穴

県天然記念物

高梁川の支流成羽川の上流にあたる東城川の河床は、新世代第三紀中新世(今から約3,500万年～2,500万年前)の古瀬・内海の海底に堆積して成立した泥岩層で、一般に「なめら」と呼んでいる。

この比較的やわらかい河床面に、大字川西・川東・東城を流れる付近約3.5Kmにわたって直径20cm～200cmに及ぶ錨穴(ピットホール)が数百個も分布している。小礫を水流が渦状に回転させて穿れた穴で、他地域のものにくらべ、広範囲にわたって量・質ともに豊富であり、学術的に価値が高い。



東城町重要文化財

長尾隼人供養塔

法恩寺 ④東城町川西

川西北部の比奈の山腹にある。猿渡山密院と号し、真言宗御室派。本尊は阿弥陀如来。空海の開創と伝え、その年代を旧版「広島県史」などは大同二年(八〇七)、旧版「広島県史」所収の正徳の調書、「国郡志下調書出版」は天長一〇年(八三三)とする。同書出版には「承和年中讃州多度郡普通寺より良伝法印弟子智海阿闍梨共住職其節は普通寺末寺に有之候処天安二寅九月如鑑焼失、それよりやや暫く無住にて寛平九己年有快法印再建立、永正九申正月二十六日炎焼」とあるが、旧版「広島県史」には仁寿三年(八五三)春焼失したと伝え、貞観二年(八七〇)江州坂本(現鹿野大津市)の良意が中興したとある。

山王社を鎮守社とし、大仙社も祀られていること、神猿の伝説があり山号を猿渡と書いて「さるおう」(さんのおう)の転訛と訓まされていること、中興に江州坂本の良意の名があること、「芸藩通志」に「阿弥陀仏春日御作、不動明王智証の御作」とあること、天台修験に基づくと思われる多岐行事(大めし祭)が現在伝わることなど、天台系の要素が濃厚で、古くは天台寺院であったことがうかがえる。天正年間(一五三九)三紀村高野山から華清法印がきて再興してから(国郡志下調書出版)、金剛峯寺の末寺となつたと伝え、寛延四年(一七五二)に京都御室の仁和寺の末寺となる。古くは本藤坊・中藤坊・浦藤坊・西坊・新坊・明王院・田口坊の七院坊があつたというが(三藩通志、現在はない)。

寺院が神社を管理する別当制度が奴可郡では特殊な形で明治初めの神仏分離まで残り、「国郡志下調書出版」によれば、奴可郡東部三ヶ村内の神社の神社に際して法恩寺は運営導師として立会った。このため社寺間の所役上の紛争も絶えず、これを証する多くの済口証文が残る。福島氏時代の五品城城主長尾一勝は寺領一五〇貫文を寄進して折願寺と定め(同書出版、慶長一七年(一六二二)大般若経六〇巻を入手して法要を行っていた寺蔵経蓋裏書)。この大般若経は南部版を中心に南北朝時代の美作版や筆写本で補っているが、とくに筆写本八四巻は延文五年(一三六〇)から永和四年(一三七八)にかけて筆写されたもので、いったん中庄八幡宮(現因島市)に奉納されたものがなにかの縁で当寺に再奉納されたものである。本尊阿

弥陀如来坐像は平安末期の作とされ、鎌倉初期および中期の作とされる観音菩薩立像二体、室町初期の作とされる不動明王立像、仁王会の本尊として用いられたと考えられる五大力明王画像、奴可郡東部三ヶ村内の神社の棟札を記録した「川西村法恩寺運営導師棟札写本」など

徳雲寺 ④東城町菅

万松山東白峯と号し、曹洞宗。本尊釈迦如来。長禄元年(一四五七)領主宮政盛が周防國豪雲寺(現山口市)の寛應を招いて開山したという。末寺・孫末寺は五三ヶ寺を数え、四世から八世までの住職は朝廷から紫衣と准師号を受けている。

開山伝説によれば、寛應が旅の途中当地で藍染という鬼を仏徳で改心往生させ、住民の不安を取除いたので、その徳を慕い永住を願う住民の訴えが領主を動かし、宮政盛が一二年間をかけ七堂伽藍を完成させたという。現在、広大な境内に本堂・勸修堂・三門・開山堂・中書門・観音堂・僧堂・庫院・回廊・鐘堂などの建物が配置され回遊式の庭園もみごとであるが、ほかに諸堂・諸坊の基礎跡が数多く残り、創建当時の規模をしのぶことができる。完成までに寛應は没し、実際の開山は二世宗梅となつたが、その徳をたえ寛應を開山に祀えたという。徳雲寺の周辺一帯は鉄穴流しによって地形が変貌しており、古く製鉄が大規模に行われていたことを明確に示している。この伝説中の藍染鬼はあるはこの地方で絶大な権勢を振るっていた製鉄支配者ではなかったとも考えられる。

「薩摩太平記」によると、天文三年(一五五四)尼子晴久が同族尼子誠久を殺したとき、誠久の三男助四郎のちの勝久は二歳であったが、山中鹿之助の計らいで乳母とともに徳雲寺に落ちのび、五世住職寛海のもとで一〇余年間養育された。永禄九年(一五六六)尼子義久が毛利氏に降伏したため、助四郎は毛利氏の領国に住むことを嫌い上京して京都東福寺で修行、のち鹿之助に擁立されて同一二年尼子再興の旗を掲げることになったという。結局、

再興は失敗し、天正二年(一五七四)勝久は自害。鹿之助は捕らえられ護送の途中備中で殺され、その首級は頼房(現山口市)に埋葬されたが、従者は夜中ひそかに首級を徳雲寺に持帰り、改めて供養をしたという。現在、当寺には鹿之助の首塚がある。

徳雲寺から〇・五キロの山中に藍染鬼が人命をつぶして食へたという、元戸とよばれる臼状の石がある。

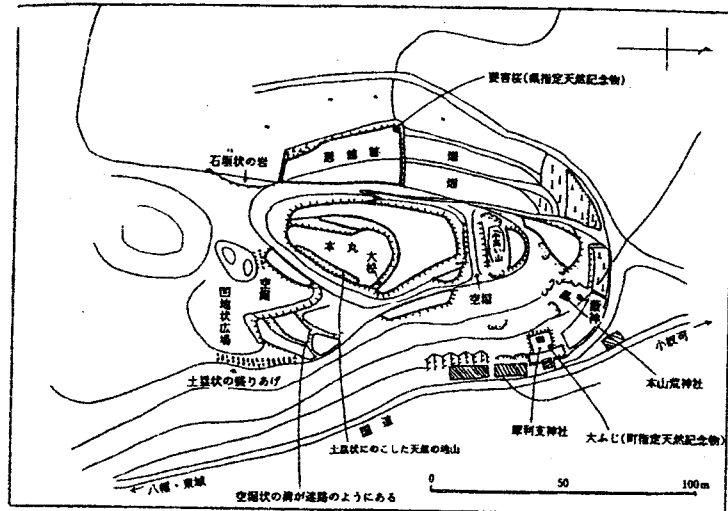
同十六日、伊豫より飛脚到来す。去年冬比より、河野四郎通清をはじめとして、四國の物共みな平家をそむひて、源氏に同心のあひだ、備後國住人ぬかの入道西寂、平家に心ざしふかりければ、伊豫の國へおしわたり、道前、道後のさかひ、高直城にて、河野四郎通清をうち候ぬ。子息河野四郎通信は、父がうたれる時、女藝國住人奴田次郎は母方の伯父なりければ、其へこえて有あはず。河野通信ちをうたせて、一やすからぬものなり。いかにしても西寂を打とらん」とぞうかひける。額入道西寂、河野四郎通清をうて後、四國の狼藉をしづめ、今年正月十五日に備後のともへおしわたり、遊君遊女共めしあつて、あそびたはふれさかみりけるが、先後もしらず酔ふしたる處に、河野四郎おもひききたるもの共百余人あひ語て、ばととおしす。西寂が方に三百余人あひける物共、にはかの事なれば、おもひもまうけずあはてふためきけるを、たてあふものをばふせ、きりふせ、まづ西寂を生とりして、伊豫國へおしわたり、父がうたれたる高直城へさげもてゆき、のこきりで頸をきりたりともきこえけり。又はつげにしたりともきこえけり。

四〇 龜山城跡 (2) 大字小奴可

位置・環境 小奴可盆地の南側の出入口部にあたる標高約五八〇メートル、低地からの比高約三〇メートルの独立丘陵上に築かれている。

たとおもわれるが、北側の削平段との段差はあまり明確ではない。主郭の東南端には、自然の地盤を削平して土塁状に残した施設がみられる。北側は深い堀切で画されており、堀切の北には土塁状の高まりがみられる。また、主郭の東南側麓には、小さな堀切や土塁状の遺構があり、西麓には、居館跡といわれる長方形にちかい平坦地がある。各郭の削平は、いねいで郭や堀切部分の切岸も明瞭である。小規模ながら山城の構造としては、堀切や土塁、切岸の整備など防御施設がよく整っているといえる。

特色 城域を郭群で囲み、郭も地形に沿って段状に配していることや、堀切、切岸の発達など構造からみると室町後半期の城の特徴をもっている。しかし、本城が、小奴可盆地を一望できる要地を占め、しかも低い独立丘陵を利用して築いていることなどから推測すると城の縄張りの成立は、さらに遡るものと推定される。恐らくは、はじめは西麓の居館および山頂部の削平段が設けられ、その後、室町後半ごろになって山頂部削平段の拡張や堀切、土塁、切岸などの施設が整備されたものと考えられる。

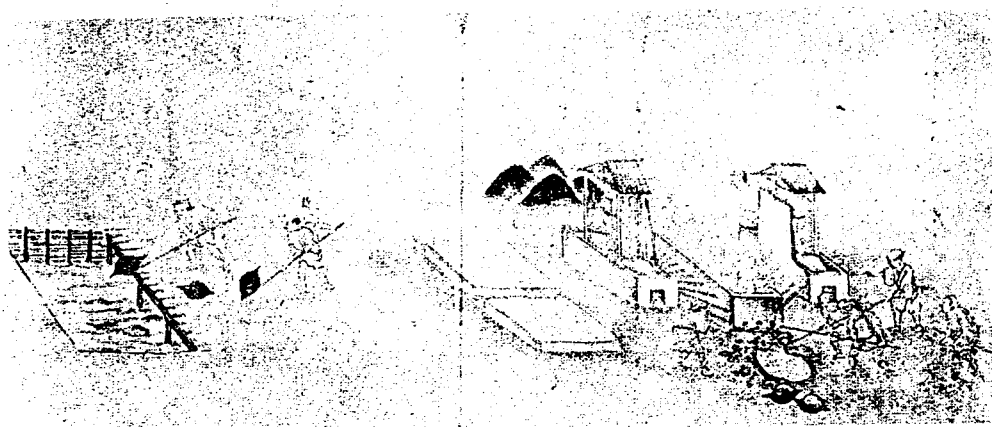


第306図 龜山城跡付近地形図

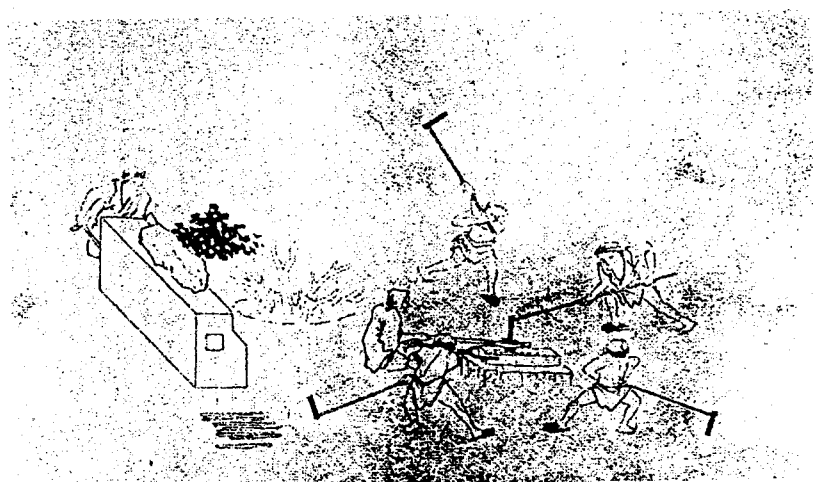
寄進地系荘園が成立していること、正作田が存在していることなど在地領主の影が見え隠れするが、その実体は詳かでない。その中で『平家物語』の諸本にみられる奴可入道四叔が注目される。源平争乱期に平氏側で活躍している西叔が、奴可を称することから奴可郡の在地領主としての伝承が定着している。史料を検討してみると、一四世紀ごろからこのような見解が示されるようになったことがわかる。その事実の究明にはさらに研究を必要とするといわざるをえない。『庶軒日録』の文明十八年(一四八六)四月廿七日条では、西叔を宮氏の先祖とするようになってい



淘鉄図 其ノ三 砂鉄駄送



淘鉄図 其ノ四 製錬作業



淘鉄図 其ノ五 鍛冶場